BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No・49
2011・1.21

〒102－0094　千代田区紀尾井町1－1　千代田放送会館　3階
TEL&fax　03－3221－0019　E-mail info@hosojin.com
代表幹事　今野勉　編集担当　伊藤雅浩(会報編集長)、鈴木典之、松尾羊一　事務局　佐藤真美子

原点にかえる

豊かで熱い発信力を

代表幹事　今野　勉

明けましておめでとうございます。

ことしの放送人の会の最大のイベントは、日本が当番の日韓中テレビ制作者フォーラムです。

常任組織委員長の鄭秀雄さんが、昨年12月の当会の忘年会に韓国から参加しました。ことしの日本でのフォーラムに対して、ある思いを私たちに伝えるためです。その話から始めます。

日韓中テレビ制作者フォーラム

鄭さんの思いを一言でいえばこうです。

〝原点にかえろう〟

10年まえ、日本と韓国の制作者が、関釜連絡船の船上で議論したのが当フォーラムの始まりです。口論にも近い熱い激論が交わされたといいます。

その後、中国が加わり、各国に組織が出来、賞が設けられ、共同制作や流通（番組売買）についても話し合われるようになりました。

鄭さんは、そうした流れの中で、制作者同士の議論や交流の時間が少なくなっていることに危惧の念を抱いているのです。〝原点にかえる〟とは、制作者同士の議論や交流を第一に考えようということです。

私は鄭さんの思いに共感しています。日本でのフォーラムでどう具体と考えていきたいと思っています。

放送人の会の原点とは

原点にかえる、という言葉に触発されて、放送人の会の原点は何だったか、新年早々あらためて考えてみました。

1993年、NHKの紀行ドキュメンタリー番組で〝やらせ〟があると新聞に報じられたのに続いて、民放でも番組制作上の不祥事が相次いで発覚し、私たち制作者に対して活字マスコミや視聴者から厳しい非難が寄せられました。それらの非難は大筋では尤もではありましたが、番組制作について認識不足が原因と思われるものもかなりありました。

私たち制作者が、日頃から活字マスコミや視聴者に対して、ほとんど発言、発信してこなかったことの責任を痛感させられたのでした。それが放送人の会の発足につながったことは、皆さんご承知の通りです。

現在、放送人の会が催すイベントのほとんどは、視聴者（一般市民）向けのものです。活字マスコミ向けの発信が少ないのは、イベント化しにくいからでしょうか。それならば、というわけで、

隗より始めよ

言い出した者がまず実行せよ、身近なことから始めよ、という格言に則っての私の年頭の発信です。

昨年放送された拙作「鴎外の恋人」（11・19NHK）についてのギャラクシー賞選奨委の三行の短評の中の一行にこうあります。（「GALAC」2月号）

「制作者のこだわりと文献資料の解読に止まっているきらいがある」

〝制作者のこだわりに止まっている〟の言葉の意味が腑に落ちません。

森鴎外の恋人をつきとめるというテーマが制作者の単なる私的なこだわりである、という意味なら、百年以上にわたっておそらく百人以上の研究者が追ってきたテーマは、研究者たちの単なる私的なこだわりということになってしまうが、そういうことなのでしょうか。

検証の手続きがこだわりに止まっているという意味なら、歴史上の謎を解くために正確で緻密な検証結果を提示することにこだわるのは当然であってそれ以外の私的なこだわりなど入る余地はありません。

〝文献資料の解読に止まっている〟とのことですが、番組の核心は、鴎外の遺品のモノグラムの型金（刺繍用具）の解読であって、文献資料はその解読の傍証であることは、誰が見ても明らかです。

批評は自由とはいえ、それは、対象となる作品に表出されたものを正確に把握・認識することを前提に許されるものです。誤解や認識不足を基にした恣意的批評は、制作の活性化に何の役にも立ちません。

以上、私なりの発信第1号です。

2011・年頭所感・挨拶

軽井沢朗読館

青木裕子

退職金を元手にローンを借りて軽井沢朗読館を作って半年が過ぎた。朗読専用のホールとしては日本で最初というから世界でも最初かもしれない。お手本がないので昨年の夏は何もかもが実験、試行錯誤で失敗もたくさんあり、存在を知ってもらうだけでもいかに大変かを痛感した。友人たちはボランティアで心底手伝ってくれたし、人情がこれほどありがたく身に沁みた年はなかった。しかしいつまでも甘えてはいられない。ご恩返しもしたい。

朗読を中心に据えてはいても音楽や映画などの催しも次々に企ててみた。そのたびに、あたりまえなのだが経費がかかる。山の中のホールの運営など土台もうかることではないので、ホールの収益はゼロにしたところで、出演の方たちや仲間達に負担がかかる。人を雇えばいいのだがだんだんと大がかりになって、純粋にいいものを提供していきたいという当初の目的を見失わないか。きっと自分のことだから見失う、どうしたらいいのだろうと悩む。

そうこうしているうちにこの夏の魅力的な企画も持ち込まれて、うはうはと嬉しくなり少しずつ夏のカレンダーが埋まっていく。

でもいったい自分は何をすべきなのだろうとまた悩む。

今年はいっそ夏中ずっと軽井沢にいて、毎日自分でワンコイン朗読会を開くことにしようか。いつでも行けば朗読が聞けるという態勢を作るのが大切なのでは・・・・。自分がいられない日は朗読を代わってもらって・・・。そんな人いるかなあ。また負担かけちゃうかも、と結構新年早々弱気な日々。でもま、やってみなければわからない、とやっぱり試行錯誤は今年も続きそう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

金沢を離れます

赤井朱美

今年は年女、2月に還暦を迎え、サラリーマン生活にピリオドを打つことになりました。石川テレビ在職中は公私にわたり誠にお世話になり心より感謝申し上げます。

4月からは、夫がオーストラリアの日本大使館勤務になるため、私もしばらくオーストラリアで生活することになりました。

郵便物は1年間お休みしてください。帰国しましたらご連絡します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「今年は…」

石橋　冠

早いもので、「名作の舞台裏」も今年で10年の節目を迎える。なんと、30回到達も間近である。

年頭にあたり、ご協力いただいた会員諸兄、そして峰野千秋さんはじめ放送番組センターの皆さんに、改めて感謝を申上げたい。

嬉しいことに、前回から渡辺紘史さんが司会陣に加わり、さらに2年にわたって陣痛をつづけた「6羽のかもめ」が、やっとこの2月に着地した。

これからは、とかく遅れがちな悪癖を是正し、円滑な運営に努めたい。

さて今年は「日韓中テレビ制作者フォーラム」が、札幌で開催予定ときく。STVの林健嗣クンが活躍の様子だ。永いつきあいの後輩だが、彼はとにかく誠実で責任感が強い。いろいろ大変だろうが、ひとりで多くを背負いこまないことを祈っている。

ぼくも札幌は故郷なので、その時は林クンの手足となって手伝う心算でいる。

ここで、ふと考えたのだが、北海道産のドラマには、地方色豊かな秀作が多い。もし諸般の事情が許すならば、フォーラムに合わせて「名作の舞台裏・札幌パート2」をやるのも面白いのではないかと思う。

役に立てばの話だが、そのことも視野に入れておきたい。

本年も、よろしくお願い致します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

遅ればせの藤村

市岡康子

昨年夏、信州小諸に行った。島崎藤村が数年私塾で教えたゆかりの地だが、『千曲川旅情の歌』にある「千曲川いざよう波の、岸近き宿にのぼりつ」の宿、中棚荘（おすすめです）に泊まり、懐古園内の「藤村記念館」をじっくり見学した。

そこで彼の作品をまったく読んでいないことに気づき、遅まきながら『夜明け前』を読むことにした。中仙道の馬籠宿の本陣・庄屋の主人だった藤村の父をモデルにした長編小説である。かれ青山半蔵の平田派国学研究仲間として中津川の本陣主人も登場するが、この人物は市岡の本家筋に当たり、そんなことにも興味を惹かれた。

「木曽路はすべて山の中である」に始まる本書を、青山半蔵の半生記と予想して読み始めたが、実際は馬籠宿という小さな窓を通して、ペリーの来航（1853年）によって幕藩体制が動揺し始めるころから、明治19年（1886年）に至る維新前後の歴史小説の様相を呈しているのは意外だった。

和宮の降嫁、京都を目指す水戸天狗党、徳川慶喜征討の東征軍などがこの小さな宿場を通過してゆく。

第2部上巻（文庫版）など、はじめ四分の一は米国のハリス、英国のパークスをはじめとする欧米列国の代表たちの動向を詳述していて、小説の構成としてはいかにもバランスが悪いと思ったのだが、文芸評論家の篠田一士氏は、本書をトルストイの『戦争と平和』に比肩すると評したという。篠田先生には大学時代に英語を教わったが、その物言いの辛辣なのには、身のすくむ思いがしたものだ。

若いときに読んでいたら、こういう部分は飛ばして、明治維新という変革期を生きた誠実多感な半蔵の悲劇としてしか受け取れなかったかもしれない。この年齢になっての読書も悪くないようだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

断固！「9条」

宇野　昭

写真は昭和22年、日本中の家庭に配られたものです。「テレビを始める」のでと由緒ある寺の住職を継がず、家財ごと放り出されたとき、持ち出しました。初心忘れず。我が家の宝です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

怠けの余録

大藏雄之助

おとどしまでは毎年一冊本を出していたが、綿密に調べることを面倒に感じるようになったことと、出版不況のせいもあって、だんだん怠け癖がついてしまった。

物書きの側にあるときは、自分の著述に関係のある資料を読むことに時間をとられることが多かったが、それをやめたので幅広いテーマを選ぶことが可能になり、また読書量も格段にふえた。実に楽しい。

最近読んだもので我が意を得たのは、数年前に買いおいたままにしていた『殿り合う貴族たち』（繁田信一著、柏書房）である。サブタイトルに「平安朝裏源氏物語」とあるように、主題は『小右記』などの当時の日記に残されている平安時代の貴族の暴力行為の数々である。私が感心したのは、本題から少々それるものの、この本の中での女性の名前の読み方である。

古代はもとより奈良時代までと鎌倉時代以降は女性の名前の読みがきちんとしているのに、平安時代の貴族の女性に関しては、これまで私の知る限り、すべて音読みとなっていた。これは漢字の読み方に不明なものがあるためである。例えば清少納言が仕えた中宮定子はテイシ、紫式部の主人の中宮彰子はショウシとされてきた。

これらの方々を「さだこ」「あきこ」とすれば90パーセント当たっていると思うが、テイシやショウシであったことは絶対にない。それを文学や歴史の研究者たちが一様に安直に音読ですませてきたことは怠慢のそしりを免れまい。

著者は娍子、恬子といった漢字名にも「すけこ」、「やすこ」というふりがなをふっている。その根拠がどのようなものであるかは、当方の浅学菲才によりつまびらかにしないが、仮に試みとしても賞すべきではないだろうか。

（注　娍は　女偏に城）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

年を重ねる

大山勝美

ジャン・リュック・ゴダールの6年ぶりの新作「ゴダール・ソシアリスム」をみた。例によって難解である。客船がエジプト、パレスチナ、ナポリとたどりながら、ギリシャの民主主義、帝国主義、資本主義、社会主義などヨーラッパ精神から生まれた諸体制の破綻を議論しあう客。そのほかいくつかの話が自由に飛躍し交錯する。

それにしても、不気味なまでビデオによる映像は若々しい。80歳の監督作品である。

同年のクリント・イーストウッドも新作を製作中。マノエル・デ・オリヴェイラ監督は102歳で、新作を準備中だという。日本でも新藤兼人（94）は、車椅子で監督をこなし、井上昭（82）氏は時代劇の現場でひっぱりだこである。当会の石井ふく子、岡崎栄のお二人は80すぎで元気に活躍されている。

こちらも、世の中の事象に血は騒ぐが、徐々に体が自由にならず戸惑っている。年を重ねると、地球の引力をつよく感じるようになる。足腰が、自分のイメージ通りに動かないのだ。いまさらのように、地球の重力のつよさを実感している。

アンチエイジング、健康グッズあれこれに目移りして試している。だが宣伝文句通りの効果はなかなか現れない。

「無縁社会」。人に知られることなく孤独死する高齢者が年間3万数千人。NHKの番組は流行語にもなった。「孤族」の集合体で共同体が底抜け状態の日本で、新しい社会的〝縁をつくる〟のは、インターネットよりも「テレビ」や「ラジオ」だと思っている。

そのために、何かお役にたてないか、年甲斐もなくウロウロしている往生際のわるい老兵なのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

書初めや弘法無縁の漢字仮名

荻野慶人

新しく追加された196字の常用漢字表に表題の俳句をあしらって、僕は今年の年賀状とした。

表意の漢字、表音のひらがな、外来語やオノマトペなどのカタカナから成り立つ〈漢字仮名まじり文〉。この世界に例を見ない現代日本語の素晴らしさを毀したくない僕は、漢字が見直される度に嬉しくなるのだ。

昭和25年の正月、敗戦国日本の津々浦々に絆と夢を…と民間人のアイディアが採用されたお年玉付き年賀葉書が楽しく、高校2年の僕は親戚や新しく出来たガールフレンドなど20名足らずに、毛筆で賀詞をしたためた。

年を重ねること60回の平成20年代は、卒業後顔を見ていない小学校の親友2名をはじめ遠近濃淡多彩のほぼ定着した約500名に宛て、同文の年頭所感をパソコンでプリントしている。

一方「後期高齢を機に年賀の儀を卒業させて頂きたく…」との引退表明に異議なく肯き、古稀を過ぎて知り合った放送人の会の諸兄姉その他への欠礼を、この場を借りて容赦願おう。

埼玉の某映画人の場合、何故か高知の実姉から喪中の挨拶で傘寿の昇天を知らされた。僕も一月末には78歳になる。服喪挨拶を書く親族に配慮すると、傘休と洒落る潮時もあり得るか。

高峰秀子さんが暮の28日に逝去し密葬は近親者で済ませたと、TVは大晦日、新聞は元日に事後報告だ。彼女は「葬式は無用、戒名も不要。人知れずひっそりと逝きたい」とエッセーで語っていたから、本望が尊重された。

そんな年初に「グラスを傾けていると突然、去年降ろした幕をもう一度上げたくなり…」と81歳のアンコール年賀状が舞い込み、やっと初笑いだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

初富士、初もの、きぬかつぎ

織田晃之祐

初日、初春、初夢、初富士…。年の始めの風光、風物などの概念に「初」を冠せて「初もの」として賞し讃える、この様な修辞、言葉のあやが、日本人は好きである。

「初富士にかくすべき身もなかりけり」中村汀女さんである。富士を見る。初富士を見る。しかし、そのあまりの神々しさに、凝視した筈の己自身が、逆に見返されて恥じ入るばかり。いや、まさに恥多き人生真っ只中の当方、かくすべき身は更々ないからドキリである。

昨秋、当家人、友人達とミシュランで評判の高尾山へ登る。「まいったあ、凄い人、都内の人混みと同じ。だけど頂上へ行ったら、いい風吹いて富士山が見えた。よかったなあ。高尾山からの富士初めて！初富士よ、初富士」と言うので「エッ初富士？そりゃあちょっと違うんじゃないの」とは言わずに、軽く頷いておく。するとその晩、「はい、初ものよ」ときぬかつぎが現れた。「初」の修辞は、季節の旬のたべ物の意ともなるから、秋の初もの、きぬかつぎは正しい。

「今生のいまが倖せ衣被」

鈴木真砂女さんである。彼女もまた、あの銀座の御自身のお店で、なじみの酔客にきぬかつぎを出しつつ、そっと口添えしていたに違いない。「これ、初ものよ」…。

初富士、初もの、きぬかつぎ…。

さあ、今年こそは、汀女さんの厳しさには、なんとか耐え、家人には更にやさしく、旬の「初もの」口に運んで、真砂女さんの、今生の倖せを、つかみたいものである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

僻目録

各務　孝

八十歳を超え、「放送人の会」の年会費が半額になったことは、素直に喜ぶべきことと思われるが、とかく、老人は僻みっぽいので半額イコール半人前と受け取り侘しい思いに駆られもするのである。

矢鱈、年寄り風を吹かすのも耳障りなものなので、これではならじと、元気印の象徴とも言うべき往年のヌーベルバーグの旗手　ジャン＝リュック・ゴダールが八十歳を迎えての最新作「ゴダール・ソシアリスム」を寒空の中を観に行ったまでは良かったのだが、悲しいかな、当方に作品を鑑賞する上での基本的な知識、教養、即ち、古代エジプト　ギリシャの文化　ひいては、その流れを汲むヨーロッパ文化と現代ヨーロッパ史への理解が根本的に欠けているため　殆ど、チンプンカンプンでそれこそ、「勝手にしやがれ」の捨て台詞を吐いて映画館をあとにした次第である。なにしろ、シナリオを読んでも、「注釈」が42箇所もある始末で完全にお手上げものなのだが、プログラムに寄せられたわが国の新進気鋭の映画監督や映画批評家の絶賛の嵐の記事を目にすると今更のように、われ老いたりの感を深くし、年会費半額の事の次第を納得せざるを得ないのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

何やってんだか

金平茂紀

去年の9月にニューヨークから日本に帰国して、あっという間に4か月が過ぎ去ってしまった。その間に携帯電話を2回も失くしてしまった。何やってんだか。

もともとよく物を忘れてくる性質だが、短期間に2度も同じ過ちを犯すと、あまりのだらしなさに自己嫌悪に陥る。一回目は出張先のアフガニスタンのカブールで失くした。この時はカブール中心部のバザールを取材中にすられたのだった。ブルカを着た物乞いの女性や、ストリートチルドレンたちが集うバザールの混雑のなかである。それをナップサックの袖の網の収納部分に携帯を入れてインタビューをして歩いた。すってください、と言わんばかりの警戒心の欠如である。何やってんだか。

2回目は、年があらたまって、担当している『報道特集』の今年最初の放送日のことだった。オンエアの中身のことを頭のなかでぼんやり反芻しながら、例によってナップサックを肩に担いで地下鉄を乗り継いで職場へと向かった。懲りもせずにまたまた、携帯を袖の網の収納部分に入れていた。会社についたらないのである。おそらくどこかで落としたのだろう。何やってんだか。

それからが大変だった。首都圏のレイルロードは相互乗り入れをしているので、電車の車内で落とした場合、どこの路線でみつかるかによって、遺失物処理の管轄がすべて異なっているのだ。僕の場合だと、横浜市営地下鉄、東急田園都市線、東京メトロ、東武伊勢崎線、ＪＲ常磐線といった路線ですべて可能性があるというのだった。全部に問い合わせたがまだみつかっていない。何やってんだか。失くした携帯にはそれなりの思い出がつまっていたのに。（ＴＢＳ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

コミュニティラジオ

鎌内啓子

昨年10月から多摩東部のコミュニティＦＭ３局（むさしの、西東京、調布）の同時生放送「ハッピーうーたん」（11・00～12・00）がスタート。

私は、文化放送を定年退職後、縁あって８年振りに現場ディレクターに復帰し、現役時代より多忙な日々を送っている。

番組パーソナリティは応募者１３０人の中から選ばれた６人。子育て奮闘中のママ、元俳優、舞台女優、ワインソムリエのアナウンサー、テレビの園芸番組をしていたアナウンサーなど多彩なメンバーが揃っている。

番組は曜日毎のテーマを「育」「食」「学」「体」「楽」を２人のパーソナリティが毎回テーマを決め、放送している。この番組の最大の特長は、「うーたん」と呼ばれる市民ボランティアスタッフが、自身の感性のアンテナに引っかかった情報を毎日、街角からレポートしている。彼等は皆インターネットで応募してきた大学生、主婦、ライター、サラリーマンで７割が女性だ。その取材力、レポーター力は大変優秀で、中にはプロ顔負けほどのレポーターもいる。

コミュニティラジオは地域密着が原則だがこの「ハッピーうーたん」は多摩東部をメディアにして、情報を発しているのが従来のコミュニティＦＭと異なる所だ。

月火は西東京、水木は調布、金はむさしのＦＭから放送しているのでディレクターの私は、月は西東京へ、水は調布へ、金はむさしへと３局を回っている。まさ

に多摩を駆ける少女ならぬオバタリアンといったところだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新年の挨拶　二題　**北村美憲**

（1）オリオン座のα星座のベテルギウスは太陽系からおよそ640光年の距離にある赤色超巨星ですが、自然の摂理により間もなく超新星爆発を起こして生まれ変わる運命にあります。

宇宙の時間だから、それがこれが5年先か50年先かは決められませんが、最近の観測によればいよいよその時が近づいていて、明日起こっても不思議はないのだそうです。

……と言うことは、実際の爆発はすでに起こってしまっていて、その光がわれわれのところに届くまでの時間の問題だということでもあるのだが、このほど同郷の先輩と語らって「ベテルギウス超新星爆発を見届ける会」をつくりました。

会員は目下2名だけですが、入退会自由、入会金・年会費なし。もしもお気に召したなら、あなたもぜひどうぞ。

（2）「地球も日本も、わたしが生きている間はなんとか持ちそうだ」と、去年までは思っていたのですが、それがどうも怪しい。考えを改めました。

理由はふたつ。ひとつは、思っていたよりもわたしが長生きしそうなこと。もうひとつは相手の壊れ方が、わたしの予測を大幅に上回って進んでいることです。一九三〇～四〇年代とはまた別の苦難の時代を、もう一度体験しなくてはならないのかもしれません。その時、過去の経験が有効な免疫力となって役立ってくれるかどうか、腹を決めてかからねばならないようです。

また一年、「将来に対する唯ぼんやりした不安」の中の、貴重な安逸の時をお楽しみください。（二〇一一年の年賀状から）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

放送予定のない取材

木村　成忠（TBCビジョン）

「石巻若宮丸漂流民の会」という会が結成されて10年になる。会員は全国に百人ほどいて、市民レベルで調査、研究やイベント開催などの広報活動をしている。私が宮城県石巻市出身で年長者でもあることから6年前から会長役を仰せつかっている。

漂流譚の詳細を述べるのがこの稿の目的ではないので省くが、寛政5（1793）年、仙台藩領石巻港から江戸へむかった米・材木運搬船若宮丸が嵐で遭難、冬の北太平洋を漂流したのちロシア人に助けられる。その後数奇な運命をたどり、漂流から11年後乗組員16人のうち4人がロシア船で長崎に送還されてくる。この4人は期せずして「初めて世界一周した日本人」となった。

私はTBCラジオ在任中、国内取材編とロシア取材編と2度ラジオドキュメンタリーを制作したが、ひそかに期待した地元の関心喚起にはそれほど効果がなかった。

ならば映像番組でやってみようと社内外に企画を出してみたが、広範囲にわたるロシア取材の経費がネックになり実現させることはできなかった。

困ったことに一度「映像で」と思ってしまったら、それが頭からはなれない。ついには「放送はなくていい。自分のために自費で撮ってみよう」と考えるようになった。

かくして2005年にイルクーツク、モスクワ、サンクト・ペテルブルグ、翌年は船旅でカムチャツカ半島まで出かけた。今年はオホーツク、ヤクーツクに行ってみたい。長崎、函館もゆかりの地だ。

ラジオ番組制作30年、映像番組は一本も作ったことがないが、いま稚拙ながら映像制作を楽しんでいる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新段階迎えた情報化

隈部紀生

去年は高度情報化が一段と進んで、組織はもちろん各個人の意識レベルまで影響が深刻になったことを感じさせた。

インターネットによる個人の情報発信が普及して、ウキリークスによる「秘密」の外交公電のすっぱ抜きがあり、尖閣諸島事件の海上保安庁映像の漏洩が物議をかもした。これらの「秘密」情報によって、メディアがはじめて知ったことも多く、「秘密」情報の範囲や関係者の情報共有と漏洩との関係も論議の的になった。

ウキリークスは公表前に情報を一部の新聞などに知らせて、新聞の側が情報の信頼度などを調べるという展開もあって、一面既存メディアの取材編集力が再評価されるという逆説もあったが、内部告発の直接の持ち込み先が既存メデイアではなく、インターネットメディアだったことを忘れてはならない。ベトナム戦争末期に国防総省文書がまず大新聞に持ち込まれたのと比べると既存メディアの地位低下がみられる。

尖閣列島の映像など、いとも容易くネットカフェからユーチューブに発信され、今後同種の漏洩が頻発することが予想される。外交は今後情報の漏洩を覚悟して進めなければならないとも言われる。また政府などが秘密の保持を図るために新しい手段を講じると今度は報道への制限になりかねない。

このように高度情報化が進展して組織だけでなく各個人の行動や意識とより深くかかわり、それが社会に大きな影響を与える時代になった。人類を構成する各個人が情報をどのように取り扱い、社会はそれをどのように処理するのか。かなり基本的な原点に立ち返って、新しい社会契約のようなものが構想されないといけないのかもしれない。初夢である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

激変するメディア　**小池勝次郎**

歳月の流れは早いものである。テレビの世界を離れて4年余、この間にメディア環境は変貌した。いまメディアの主役が、テレビからネットに交代しようとしている。およそ100年前は、映画が誕生し人々の娯楽の中心だった。50年前の1960年代は、テレビの創成・黄金時代。そして現代、50年ぶりに潮目が変わる大転換期に入っている。

昨年、象徴的な出来事が多発した。海上保安官のユーチューブへの尖閣ビデオ投稿流出事件、告発サイトのウィキリークスがアメリカ国務省の極秘外交公電を公開暴露した事件、国際テロに関する警視庁公安部の内部情報がインターネットに流出した事件等、情報が映像がいとも簡単に国境を越え大きく波紋を広げてい

る。テレビ社会が、ネット社会へと驚く速さで移行しメディアの様相を激変している。

こうした変わりゆくメディア状況を国際的な視点で検証しようと、一昨年から企画準備してきた国際フォーラムが、今年秋に実現する。

白鷗大学メディアコース、そして総合研究所メディアセンターの新設3周年を記念した公開講座「日米中・映像フォーラム～激変・進化するメディア」である。米国インディアナ大学ジャーナリズム学部長ブラドリー・ハム教授、中国伝媒大学ビデオセンター長陳衛星教授他、各国のメディア関連研究者たちが協力して、それぞれの国の変わりゆくメディア、そして進化するネット社会の現状について映像を交えて検証し、今後の姿を展望する試みである。

メディア環境の激変・進化は、人々の暮らしを豊かにすると同時に、私たちにとって大切な表現の自由、そして報道の自由またジャーナリズムとは何か、国民の知る権利を守るためにどうすれば良いかといった数々の根源的な問題を突きつけている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新春再放番組

河野尚行

正月1日、2日、サンデル教授の「白熱教室」を見た惰性で3日の深夜にも、坂本龍一の「音楽の学校」、6時間の授業を一気に受けてしまった。何事にも口をはさむ傾向のある小生も、音楽だけは、これまでに一度たりとも、自ら進んで発言したことはない。あの番組のテーマ音楽は良かったとか、あの場面につけた曲は効果的だった、といった程度の会話には参加することはあっても、音楽番組やコンサートについての感想を、つれあい以外に開陳した記憶はない。ある音楽団体の役員を引き受けてしまった時など、理事会が終わるのを、片隅でひたすら耐えた記憶はある。

そんな小生にも、坂本教授が実演を交えて司会する番組の授業は、実に面白く、翌々日も再び、録画で12回講義を全部受けてしまった。

バッハと西洋音楽についての浅田彰や岡田睦夫の解説は耳慣れた話もあったが全体は興味深く、土谷能生のジャズの話は、小生には極めて新鮮で、バラバラに記憶されていた音とリズムが見事に整理されていく快感を味合えた。

又、細野晴臣と高橋幸宏のロックやポップスについてのコメント、それにテクノ音楽で機械と人間のリズムを融合させた試みなどは、そうだったのか、なるほどなぁ、と感じ入るところも多く、すっかり感心してしまい、よし！これで都会派の同僚や若手の会話にも、積極的に相槌が打てるぞと思わずつぶやいてしまった。

すると、すかさず「あなたやめなさい。それこそ年寄りの付け刃です」と、隣から一喝されてしまいました。

長年の音楽コンプレックスは、心の中で解消するしかないか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新年おめでとうございます

坂元良江

年末にNHKの ザ・ベスト・オブ・ベストで小田実さんご出演の3番組が連続再放送された。久しぶりに小田さんの言葉の数々を聞き、改めて考え励まされる思いだった。小田さんとご一緒した番組は他にもいくつもあり小田さんへの思いは尽きない。

阪神淡路大震災から16年の1月17日も間もなくだ。小田さん提唱の市民運動で憲政史上初めての市民・議員立法「被災者生活再建支援法」が成立にこぎつけたことはあまり知られていないかもしれない。現在も自然災害が起こるたびに被災者はみなその恩恵にあずかっている。小田さんと井上ひさしさんが、これこそが民主主義だと意気投合して対談してくださった番組のことも思い出す。

小田実さん最後の番組「小田実　遺す言葉」が賞をいただきその授賞式の会場でNHKのプロデューサー諸氏から「鶴見俊輔さんの番組を作ってくださいよ」と言っていただき「鶴見俊輔　戦後日本・人民の記憶」も制作することが出来た。

その機会にテレビ番組以外に鶴見さんのインタビューDVDを作りたいと思い4回にわけて8時間のインタビューを録画させていただいた。

DVD「鶴見俊輔　みずからを語る」は500名の方々の事前予約で制作費を確保して制作を開始するという異例の方法で完成、すでに倍近い数が売れている。制作を可能にしてくださった最初の500名の方々に感謝している。

映像の仕事に関わって50年、いまだにあれもこれもと思いをめぐらすのは贅沢というものかと思うこともあるこの頃である。(テレビマンユニオンエクゼクティブプロデューサー)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

句会へ出よう

鈴木典之

会報に載る句会の盛況に感嘆しつつ、愛読もしている。「放送人」らしく、兼題に「ギャラ」「本読み」「エキストラ」など、製作現場の雰囲気が入るのも心憎い。

齢、喜寿間近となり、偶感を簡潔に作句に託してみたくなる気分もわかり、連座して技を磨きたい気も起こる。

俳句や和歌にはもともと関心があって、俳論・歌論なども読み漁ってきた。ところが、頭でっかちになり、反って実作に踏み切れなくなった。それに、なんとなく和歌の情緒好みで、透徹・凝縮の句の世界には苦手意識がある。〝俳味〟の呼吸がよく飲み込めていないのだ。おこがましくもさる句会の選句なども勉強のためと思って続けているが、自然諷詠よりも人事句に偏りがちで、内心、自分は俳句よりも川柳向きかと思ってしまう。

さて、句会同人たちの賀状はさすがに作句でのキリリとした挨拶が多い。

かの山に古兎酔ひしれて初日かな
（馬笑＝松尾羊一氏）

凍て蝶のつぶやき輪廻の物語
（とんこう＝堀川氏）

冬と春繋いでメジロ隙間飛ぶ
（康夫＝鶴橋康夫氏）

水面すれすれ川鵜飛び行き初茜
（阿舟＝西川章氏）

など、どれも堂に入って怖気づくばかりだが、味読する内に各位の句境も小生のこだわる心情発露と同質に思えてくる。虚心坦懐、兎年にあやかって、思い切って句会の末席に跳んでみようか、などと発奮する年頭である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

迎春

鶴橋康夫

「炎天に鶴の形の息を吐く」

誰かが、季節を改ざんしたようは暑い夏、寒い秋でした。

映画「源氏物語」を撮っていました。今年の暮れ上映です。

「冬と春繋いでメジロ隙間飛ぶ」

「ときめきて名のみの春の京にいて」

〝たたら踏みまだ生きている冬の蝶〟の状態です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新春駅伝

露木　茂

会員の皆様、新年おめでとうございます。

今年の正月はめずらしくのんびり過ごしました。元日の「ニューイヤー駅伝」2日・3日の「箱根駅伝」、ラグビーにサッカー。屠蘇気分でテレビ観戦しているだけなのに、スポーツ中継は結構疲れるものです。まして知っている人が出ていると尚更肩に力が入ってしまう。「箱根駅伝」のスタジオ解説に尾崎貴宏君が出ていた。去年まで3年連続で箱根を走ってキャプテンを務めた。一昨年は一年間わたしの講義を履修していた男だ。彼が書いたレポートが今も印象に残っている。メディアのとりあげ方について、実力では明らかに実力が上の実業団（ニューイヤー駅伝）が人気では「箱根駅伝」に歯が立たないのはなぜか選手の立場から分析していた。無理にドラマチックに作られた回想ＶＴＲを、本質とはほど遠いと批判してもいた。気のせいか今年の中継は過剰な演出は少なかったように思う。4日、「ユーチューブ」を覗くと広島の秋葉忠利市長が四選不出馬を発表していた。「箱根駅伝」を観て「たすき」を次の人につなぐ大切さを知ったと語っていた。「駅伝」を観ながら人はいろんなことを考えるものですね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今年は楽しいこともやりたい

永田浩三

去年の12月は、番組の録画に明け暮れた。ＮＨＫのベストオブベストで流れる番組の数々。私もかつてＢＳハイビジョンの編集長をしたことがあるが、今回のラインナップは本当にすごかった。特にドキュメンタリーは素晴らしく、毎日毎日ダビング作業でへとへとになった。よく、今のテレビは見るべきものがないなどと言うひとがいる。だが、それは偏屈なおじさんの戯言にすぎない。お粗末な番組に愚痴をこぼすことは無駄なことだ。いいものをしっかり見つけよう。ひょっとしたら、今はテレビの黄金時代かもしれない、と思うほど充実していた。

さて、去年の夏はかつての職場の抱える10年来の問題に言及し、わが身のお粗末さをひたすらさらす本を出し、その後、うつ状態が続いた。授業や若干の番組制作以外、何もできず、たくさんのひとに迷惑をかけた。今ようやく元気になりつつある。

今年はもう少し楽しいこともやりたい。手始めは、究極の変人である、私の父が元気なうちに、父の句集・随想を編集し出版したい。俳句そのものは大したことはないが、両親とも人生の転変は半端ではない。これをまとめるのが1月まで。

そのあと、これまでドキュメンタリーで訪ねた場所をもとに、カメラマンとともに作る「風景論」の出版を夏に行いたい。職場を退職したら、宮本常一の足跡を気ままに辿りたいと願っていたが、新たにいただいた大学の教員という仕事が、思いのほか忙しく、しばらくは叶いそうにない。そのかわりに、本の世界で、風景についての考察を、テレビマンや若者の目線でやってみたい。そんなこんなの日々だ。紙面をいただいたことに感謝したい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ドラマはこころに届けたいと願う

中村敏夫

異常気象による気候変動が伝えられるようになって幾年が経とうとしているのか、私には確たる記憶がない。

そして、このところそれをまた異常かと、思う自分に驚くぐらいである。もうひとつ心が痛いのは、残虐非道な殺人事件の増加だ。さらに犯人が語る動機の非道ぶりは、本当に腹立たしいばかりである。それらはすべて、未曾有の自然異常が人心を狂わせているのだろうか。

昔を、人間味ある時代だったと懐かしんでも詮無いことだが、胸がざらつく思いは空しいばかりだ。

かつて、多摩川の氾濫と家庭の崩壊という見事な着想の、深い人間ドラマに感動した。作者の山田太一さんの卓越した視点に、限られた映像ながらも、深く心を動かされたことは良く覚えている。異常気象の報道に接するとき、あの名作の場面が幾度もこころに蘇る。私のこころ深く、いまも息づいているテレビドラマの一作である。

いま、その山田太一さんと、明るく温かい人間ドラマを準備中である。私は、ドラマは視る人々の心に届けたいと願って作る。そして多くの人々に、思いを受け取っていただきたいと、神様に手を合わせて祈る。

人の世が、いつまでも平和で異常という言葉とは遠いところであり続けて欲しいと祈りながら。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

札幌大会を

フォーラムの中興元年に

長沼士朗

マスコミの今年の外交課題なるものをながめていると、日米対中国の勢力均衡、新しいアジア共同体構想をめざす努力など、いずれにしても中国の動きを抜きにしては考えられないとする論調が目立った。

ひるがえって我が日韓中テレビ制作者フォーラムのことを思い返してみると、昨年の蘇州大会で主催国の中国がとった一部の行動は、何よりも言論の自由を尊重しなければならない放送人の立場から考えると、非常に不可解に思われる出来事であった。

たとえ韓国の参加作品が自分たちにとって不利、不愉快な内容であったとしても、その表現を封殺してしまおうというのは、幅広いコミュニケーションの実現を第一目的とする放送メディアにとって、存在そのものを否定してしまうような危険性をはらんでいる。

歴史認識の壁を乗り越えて、3国の放送人の友好と交流をめざしてきたこのフォーラムも、今年の札幌大会で11回目を

迎えることになり、そろそろその目的をもう一歩進化させてもよい時期にきているように思われる。

せっかくの3国の交流であり、背中に背負っている国という枠を越えて事象を見つめようとする放送人としての視点、そんなスタンスが3国の参加者の間で共有できるようになることが望ましい。

今年の札幌大会でこうした問題を話し合うために、私には少なくとも二つの具体的な話題があるように思われる。

一つは先述の、蘇州大会で中国の関係者が韓国の作品を排除しようとしたことに対する是非について、もう一つは、中国の著作家劉暁波氏がノーベル平和賞の授賞式に参加できなかったことに対する放送人としての評価の問題である。

公式的な時間でも公式外の時間でもいい、そうした問題について話し合える機会を現出できないか、そんな問題意識を持ちながら今年の札幌大会に参加していきたいと思っている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ツーショット　西川 章

寒夕焼背に逆光のツーショット　阿舟

これは私の句だが、「ツーショット」はもともとテレビ映画業界の言葉で、「ワンショット」「スリーショット」「グループショット」などと、ワンカットに何人の人物を入れるかを表す言葉だった。しかし最近では「ツーショット」だけは、一般的に男女二人がいることを表す言葉として使われるようになっている。『広辞苑』を引くと、「①テレビ・映画撮影で、二人だけのシーン。②（男女が）二人でいること」とある。冒頭の私の句は①の意味でテレビや映画のワンカットともとれるし、②の意味で男女が逆光の寒夕焼を背に佇っているともとれる。

松明けの方撮りであげ2ショット　まつり

これはテレビか映画のロケシーン。忙しいスケジュールの俳優を早くあげるべく、片方だけを押して撮ったということ。この「2ショット」は勿論①の意味だ。

宵戎何かわけありツーショット　慶人

こうなると「ツーショット」は完全に②の意味で使われている。

「ツーショット」はテレビ・映画の業界用語であったが、今や一般の言葉となり、俳句の言葉ともなっている。

ここに出した俳句は昨年一月の「放送人句会」のものです。「放送人句会」は「放送人の会」の会員ならば誰でも参加できます。みなさまの参加お待ちしています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

安保世代　萩野靖乃

わたくしは只今73歳であるが、去年は安保50年ということもあってやたらに同期会、クラス会などというものが多い年であった。

〝それでどうなんだ〟ということは全くなにもないのである。

ところが後輩の人たちに聞かれたりすると、いっぱしのことを当事者として話したりしている。そんなことがあったので「60年安保闘争の記録と記憶」というシンポジウムに誘われたときも、仕方なく出かけたが、これには全くまいってしまった。

まず出席者が、上野千鶴子、小熊英二（これらの先生方の素晴らしさはよく認識しているが）と安保の時代と全く関係ない人達と、同世代の保阪正康であるが、その保阪にしても、京大生として京都駅周辺でデモをしていたのだというから、あの頃の緊迫した国会議事堂周辺の状況については知らないも同然である。

聴衆も若い世代が多いのかと思っていたらかなり白髪の同世代が多い。しかもノートに筆記するという変な真面目さを持つ人たちなので、その違和感と抵抗感にぐったりしてしまった。

今更、何も言うべきことはないというのが正直なところではないか。

だから同年代との会話も、最近のテレビについてということになる。

というのも殆どのものが、もう仕事を持っていないので、昼間からテレビづけになっているからである。「最近のテレビはおかしい」「偏向している」という正論から始まって「いつも同じ出演者ばかりでている」「何故オカマがあんなに出ているのか」「吉本の芸人の番組ばかりじゃないか」という的確な指摘まで、憤懣はテレビ局OBの私の方にむかってくる。いちいち立ち向かう訳にもいかないし、彼等の意見に同意することも多いので、いつも何となくもやもやした感じで終わってしまうのだが、彼等の怒りのある部分には、「自分がもはや主役ではないことの悔しさ」があるのではないかということに最近気がついた。

去年の11月のことであった。国会中継を見ていたら自民党の丸川珠代議員（彼女もテレビ局出身）が、仙石官房長官（2011年1月11日現在）の「自衛隊は国家の暴力装置」と発言したことに対して猛然たる怒りをこめて追求していた。「国家のために身命を投げうって仕事をしている人達に、貴方はどのようなお詫びをするのですか」。

このやりとりをききながら、私は少なからず興奮した。「国家の暴力装置」とはなつかしい言葉ではないか。

昔の記憶が久しぶりに甦ってきた。

こちらが意識していなくても、時代が確実に変化している。そのことを忘れてしまっていたのである。

一体、私達の世代は何だったのだろう。

テレビ局に進んだ人間も多い時代であった。

今年の7月1日、1961年入局者の同期会が青山荘で開かれる、

はたして、どんなことが話し合われるのか、そして何人が集まるのだろう。

（元NHK）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

くだらこうじ　橋本 潔

「くだらこうじ」を祀るという風習が我が家に伝わっていた。京都の桜が新緑に移るころ、祖父は衣服を改め、新しい閼伽桶と柄杓を携え山に入って行く。京都御所から北へ加茂川沿いに鞍馬街道をゆくと鞍馬、貴船の手前に市原野があり、ここが私の父祖の地である。ここで街道を右にとると静原を過ぎ能楽「大原御幸」の舞台で知られる寂光院の静寂な佇まい

がある。大原は比叡山の山麓を通る敦賀街道（鯖街道）の傍にあり、加茂川のもう一つの源流である高野川に沿って南に、京都御所へと周遊できる。「くだらこうじ」を祀る場所は静原の山の中だったが、幼少時代、従兄弟と二人で祖父の後について行き、山に入る手前で家に帰された。

京都人は喋りやすいように言葉を変えてしまう．たとえば「神泉苑」は「ひぜんさん」となる。「くだらこうじ」も呪文のようで、もとの言葉が分からない。従兄弟は地質学を学び、小学高の校長を務めて定年となったが、懸案のこの謎を解こうと言い始めた。二人で何十通りも試みてもなかなか腑に落ちない。やがて従兄弟は静原の山に入り探索を始めて、古い瓦をいくつも掘りだしてきた。この瓦を文化財保護機関に提出、其れが「補陀洛古寺」の瓦と判明し、「くだらこうじ」も氷解した。

平家滅亡後、出家して隠棲した建礼門院を御白河法皇が秘かに訪れるとき、表向きには鞍馬・貴船詣でとされていたが、さらに「補陀洛古寺」参詣も付け加えられるのでは、との説も出てきた。御幸は桜が散った4月14日過ぎに鞍馬街道を通ってと記されている。

なぜこの祭祀を長い間わが家が執り行ってきたのかは不明のまま，戦時、戦後の間に途絶えて私には謎のままである。40年以上も続けてテレビドラマの美術を受け持ってきたが、演出の久野浩平さんが昨年の正月に急逝されたのを機に、父祖の地に私の墓を加えた。目の前には「補陀洛寺・小町寺」深草の少将・小野小町の古い供養塔があり、小野の小町終焉地とされ「小町老衰像」も残されている。落ち着く場所に不足はない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

海老さま大桃さま麻木さま

堀川とんこう

格別なことをしていたわけではないのに、どういうわけか今年は年末年始のテレビを殆ど見なかった。テレビへの接触意欲が著しく弱くなっていたという感じだ。

年の瀬の少し前、海老蔵の泥酔ケンカ事件でテレビは大騒ぎだった。チャンネルをどう変えてもこの話題から逃れられないほどだった。その後が大桃美代子のツイッター騒ぎで、これも相当な量の放送があった。両事件について鳥越コメンテーターが、「もういい加減に放って置きましょうよ」といったのを偶然聞いた。しかし各局ともこのスキャンダルで荒稼ぎしているわけだから鳥越さんも止めようがない。コメンテーターは建前で発言するから、伝統芸能の品位とかファンへの裏切りとか、不倫は絶対許されない、とか言い出す。

これでした、わたしが一時的にテレビへの接触意欲を失った原因は。

芸能は暴力的ですよ。ハメ外します。自制心を失います。不道徳もします。男女のもつれたエロスなどは得意中の得意です。皆もそれが好きなんじゃなかったの？　それが芸能の重要な契機だと感じているんじゃないの？

どうして突然高校の校則のような良俗規範がテレビから大量に発射されるのだろう。たかだか酔っ払いのケンカ、中年男女の色恋沙汰じゃないの。目くじら立てることじゃない。大衆がはやし立てることでスターは作られ、はやし立てられたスターは、常人にはできないことをして大衆を楽しませる。逸脱はその大衆が支払うコストみたいなものじゃないだろうか。

テレビがあまりにスキャンダル好きなのも哀しいが、テレビのB級ジャーナリズム的なお行儀の悪さは捨てたものじゃない。ならばなぜ突然手のひらを返すように、民間信仰みたいな道徳を振りかざして、昨日の友を仇敵のようになぶるのだろう。テレビ総動員で。

これは怖いぞ、と思ってしまう。テレビの翼賛体質じゃないか。いざという時には肝心なお行儀の悪さは発揮されないで、翼賛の大合唱をやってしまうのではないか。

そんなことを思っていたら、正月の間なんとなく好きなテレビから気持ちが遠のいた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「知」と「知識」という論点を仕掛けてみた

前川英樹

昨年6月まで籍をいていたTBSメディア総研のホームページに「あやとりブログ(略称「あやブロ」)」がオープンして“せんぱい”という肩書で参加している。一人が何かを書いたら、誰かがそれについてコメントするという趣旨なのだが、軌道に乗せるには少し仕掛けが必要だったようだ。そこで、あや取り手達にチョット強引にあやを取らせたら漸く動き出した。なにを仕掛けたかといえば、アップデイトで且つメディアに関わるテーマでありたいということから、尖閣映像流出やウィキリークス問題などを投げてみた。

この“せんぱい”は、書きながら乱反射的に色んなことを思い浮かび、どんどん論点が広がる、というか拡散する傾向がある。ウィキリークスを巡ってあや取り手と議論していたら、ふとトリュフォーの映画「華氏451」に思い至ってしまった(何故そう思い至ったかは、「あやブロ」を参照して頂きたい)。

トリュフォー的＜知＞とグーグル的＜知識＞というのはなかなか良い論点のように思っていたら、あや取り手の一人から「『華氏451』の世界は人間の記憶とともに消え去ってしまうが、デジタル的知識は不滅だ」という趣旨のコメントがあって、ちょっとビックリしている。そうか、そう来るかァ・・・。

これは世代＝メディア経験の問題が背景にあり、そこから生ずる感覚の問題でもあるだろう。こういうことに出っ食わすから異分野・異世代との出会いは疲れるけど面白い。ただ、向こうも同じように面白がっているかどうか。年寄りには疲れるなァと言っているかもしれないが、マ、それでもいいか…というわけで、今年も宜しくお願いします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

TV東京「正月時代劇」を見た

松前洋一

新春ワイド時代劇「戦国疾風伝・二人の軍師」を見た。7時間の長丁場をほぼ一気に見終えた。原作・島津義忠、脚本・尾西兼一、監督・赤羽博。キャストは竹中半兵衛・山本耕史、黒田官兵衛・高橋克典、豊臣秀吉・西田敏行である。

このシリーズは、最初は12時間で放送されていたように記憶するが、今は7時間に落ち着いたようである。7時間なら見続けられる時間内であった。

出来のいい歴史劇であった。剣豪物とはちがって、歴史の流れをどう見せるかが勝負にもなるのだが、今回の尾西脚本はその宿題をふくめ、見せ場の出し入れも的確で緩急も見事であった。加えて、赤羽演出はケレンを捨て、たんたんと映像を重ねていた。はじめての時代劇ときいているが、好感のもてる演出であった。

演技陣もそれぞれ役柄を巧みにおさえ、見終えた余韻が爽やかであった。

トータルでいえば、限られた時間、限られた予算のなかでのプロデュースの成果であった。

少しほめすぎかとも思えるが、時代劇ファンとしては、この正月うれしい作品であった。

昨年は劇場映画に時代劇がふえた。一方テレビは時代劇が減りつづけている。テレビは連続なり長時間作品に適したメディアである。メディア特性を生かしたテレビ時代劇の復活に期待をかけたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

35年前の取材メモ　明神　正

年末に物置の整理をしていたら、NHK社会部で宮内庁を担当していた昭和50年頃のメモ帳がいくつか出てきた。

当時、昭和天皇はお元気だった。メモ帳をめくると両陛下の訪米と帰国後のテレビ記者会見、エリザベス女王を迎えた宮中晩餐会の初のテレビ中継、「終戦の詔勅」の録音盤をNHK放送博物館に「御貸下げ」になった経緯などが記してある。

メモ帳の中には、木戸幸一元内大臣に単独取材したときの走り書きもある。今、読み返しても興味深い。木戸は、極東裁判で終身禁固刑の判決を受けたが、昭和30年に仮釈放となり、一時、大磯にこもったあと青山のマンションに移った。

木戸は、昭和16年、第三次近衛内閣の後継首班に東条陸相を推薦した背景やミッドウェー海戦惨敗を知った情報ルートなど、多くの質問に率直に答えてくれた。

この中で木戸は、日米開戦を主張する東条ら主戦派を「毒」と表現し、「それでも東条のほかに適任はいなかった」とコメントした。

木戸は2年後鬼籍に入り、再取材は叶わなかった。87歳だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

転機　村上雅通

2011年、私は人生の大きな転機を迎えることになりました。

入社して34年、ニュース、番組作りお最前線に身を置いてまいりましたが、3月をもって熊本放送を退職することになりました。

4月には長崎県立大学国際情報学部でジャーナリズム論やドキュメンタリー論などを担当する教授に就任いたします。

これまでの経験を活かした個性あふれる授業を展開しようと意欲満々ではありますが、大学教育は未知の世界です。これから試行錯誤の繰り返しになるでしょう。

一方で、取材者（研究者）としての活動も継続していく計画です。環境が変わり、また新たな視点が生まれるかもしれません。

熊本放送とは、4月以降も「アドバイザー」としての関係が続きます。

今後とも、どうかよろしくお願いいたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

謹賀新年　吉村直樹

昨年はイベントに追われた1年でした。我が家の近くにある芥川賞作家、開高健が育った家が保存かなわず1月に解体されます。年末この家で名残の「一夜限りのトリスバー」を開催しました。開高健については今年2月11日から20日までなんばパークス7Fホールで大阪で初めての開高健展を開催します。是非お運びください。

（開高健の家）

また戦時中の学童疎開体験者から元気な内に同窓会を開きたいとの要望を受け、疎開先となった河内長野市で66年ぶりの同窓会開催のサポートしました。子供にも及んだ戦争体験を語り継いでゆきたいものです。

「田辺の模擬原爆追悼式典」、同じ町内で1万匹のホタルを育てているお宅と協力して「七夕とホタルの夕」、田辺の故事を再現する「住吉神社への神馬ウオーク」、地元大阪を再発見する「大阪あそ歩」のガイド、また地元でまぼろしの野菜といわれた田辺大根も他のなにわの伝統野菜とともに復活から普及の段階に入りました。産経Web主催の田辺大根を食する会も盛況でした。1月6日の朝日新聞夕刊（全国版）にも取り上げられ、1月23日のテレビ朝日の番組で関東にも紹介されます。

（田辺大根）

3月発行の「大阪人」はなにわの伝統野菜特集です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして皆がバカになる　渡辺紘史

腹立つばかりの朝の情報バラエティー。この日もA局のコメンテーターの発言に、耳を疑った。「国民にとって、誰が官房長官になっても関係ない、それより政策を語って欲しいですね」各紙朝刊を前にした、したり顔の解説。冗談じゃない、テレビが視聴者国民の歓心を買うために、政治家に政局を語らせ、その上で一刀両断、切って捨てる。国民にとって官房長官に誰がなるかは重要問題だ。官房長官次第で政策は決まる。その政策を語るのがメディアじゃないか。テレビは、国民や政治家までもバカにし、自らを貶めている。

同日、メディアは菅首相がネットニュースで長々と持論を述べたと報じた。数日前には秋葉広島市長が記者会見を拒否、ネットで不出馬を宣言し、小沢一郎はお気に入りとの対談をネット発信し続ける、そう伝える新聞、テレビから危機感は感じられない。かつて新聞を追いだした佐藤首相とは違い、これら政治家の対応はわからぬでもない。コトを論じるに、どうした、何してる、何故やらない、早くやれ、態度が悪い、謝れ、謝り方が悪いと、〃岡ッ騒ぎ〃するばかりで、政策を論じない無責任なメディアとは何なのか

と考えたくもなる。ネットより、テレビという情報メディアの役割をなお信じる私は、完全デジタル化の今年こそ、テレビが変わってほしい、と切に思う。

と書いてきた丁度その時、Fテレビの老舗歌番組から、「テレビジョン」という歌が聞こえてきた。真心ブラザーズなる2人の若者がまじめに歌い、放送は何のコメントもなく終了した。初めて聞くその歌詞のサビは「テレビがバカを作り出し、バカがテレビを作り出す　テ、テレビジョン、テ、テレビジョン」――2011年1月8日午後6時25分、ホントです。

「楽しくなければテレビじゃない」から「バカじゃなければテレビじゃない」か。シュールなロックの歌詞というなかれ。現実は「バカなテレビが、国民を、政治家をバカにし、そして皆がバカになる」だ。

第29回名作の舞台裏

「6羽のかもめ」
（1974年10月～75年3月、フジテレビで放送）
日時・2月26日（土）
午後1時半～
場所・横浜情文ホール
ゲスト・淡島千景（出演）、倉本聡（脚本）、島田親一（制作）
司会・ 石橋　冠

第24回放送人句会

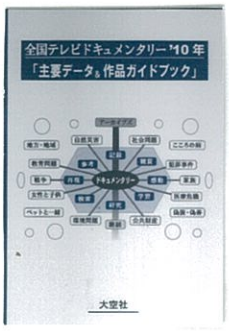
◇平成23年1月12日（水）
◇於…赤坂・麦屋
◇出席…伊藤視郎、上村暁蛙、荻野慶人、豊田まつり、新村もとを、橋本きよし、堀川とんこう、松尾馬笑、森治美、西川阿舟（10人）◇不在投句…鶴橋康夫
◇兼題…凍蝶、破魔矢、社長の辞

右手に破魔矢左手に蛸焼父帰る　阿舟
凍蝶のつぶやく輪廻の物語　とんこう
逆賊の社の破魔矢で運試し　暁蛙
凍蝶が砲撃されし島にかな　視郎
社長の辞なくて不気味な事始め　暁蛙
接写する凍蝶の翅やや動く　視郎
振袖が破魔矢にからむ二天門　暁蛙
凍蝶やたましひの如鎮まれり　もとを
凍蝶をそっと間に指と指　まつり
社長の辞短かく終り淑気満つ　視郎
凍て蝶をじっと視てゐる迷ひ猫　暁蛙
チンチリン破魔矢はしゃいで晴着の娘　慶人
本年も寒波熄まぬと社長の辞　もとを
冬の蝶赤き鉄橋を渡り切る　とんこう
覚えなき破魔矢鴨居にさされあり　まつり
凍蝶や湖暮れてゆく近江富士　きよし
凍蝶や訃報のあとの言葉なく　きよし
社長の辞書いて破りの二日かな　治美
居酒屋に忘れられたる破魔矢かな　もとを
凍蝶に時計古びた音で鳴る　きよし
お茶引きの凍て蝶群れる銀座裏　馬笑
野尿をしつゝ凍蝶見つけたり　阿舟
冬の蝶ゆく先もなく我肩に　治美
翅凍つる蝶よ花よは夢の夢　慶人
凍蝶に明石海峡橋光る　きよし
凍て蝶や生きんがための面構え　康夫
摩崖仏その胸元へ冬の蝶　きよし
破魔矢さす明けの東都に富士白し　暁蛙
車両部を焚火に集め社長の辞　もとを
泣初の二〇一一社長の辞　まつり

次回放送人句会

◇3月9日（水）18・30頃～
◇於…赤坂・麦屋（Fax03-3586-0056）
◇兼題…水温む、椿、ロケ弁（春の季語）
◆特別選者…星野高士氏

【新刊紹介】



「全国テレビドキュメンタリー10年」
～主要データ＆作品ガイドブック～

会員・鈴木典之氏が編集する業界唯一の番組「年鑑」10年版。07年版以降4冊目で、資料編（3巻セット）を加えると00年からのテレビドキュメンタリー状況が網羅されたことになる。

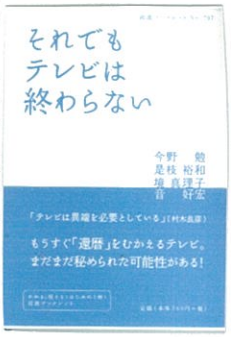
今回は特に第1章「年間の概観」が充実し、会員の放送評論家たちが分野別作品論考を寄稿、他に類のない年度論集としても生彩を放っている。

（大空社刊・6、000円）

「願わくは、鳩のごとくに」
杉田成道　著

57歳で27歳の若妻と再婚し、3人の子を作った会員・杉田成道氏の自伝小説。話の中に「北の国から」のさまざまなエピソードが語られ、杉田自身のドラマと重なる。この年での子育ては実に大変な苦労だが、ひとの苦労はおかしくて面白く、ときに涙をさそう。「北の国から」にまけない上質の人生・家族のドラマだ。

（扶桑社刊・1、400円）



「それでもテレビは終わらない」
今野勉・是枝裕和・境真理子・音好宏　共著

村木良彦氏が亡くなった2008年の秋、「地方の時代映像祭」で行われた村木の思想を語るシンポジウムでの論議を踏まえて、テレビのいまとこれからを問う発言集。80ページのブックレットだが、テレビの本質・根源を論じて実に重厚な内容である。（岩波書店・560円）

さあ、札幌大会！

STV・林 健嗣

デジタル元年、テレビが新たな開局を今年迎えたことになります。元旦に「テレビはますます面白くなる時代」と賀状に寄せてくれた頼もしいテレビ編成マンがいます。私も、期待を込め大言させて頂きます。テレビのアジア大航海時代のはじまりを是非ご一緒に楽しみましょう！と。

9月下旬の札幌開催の準備を地元の幹事として、昨年から進めていますと誠に感慨深いことが次から次と起こりついに「テレビのアジア大航海時代」の真只中に自分はいると自らを勝手に鼓舞する心境に至ったという訳です。札幌開催には、多くの諸先輩に応援とご指導をすでに受けています。

特に、北海道ゆかりの会員の方が後方支援に立ち上がって頂き、心強い限りです。夕張の今野氏、札幌の石橋氏、音氏、（放送批評懇談会）そして北見札幌と赴任経験のある河野氏、本当にありがとうございます。地域の現場にいる制作者たちの参加はもちろんこと市民が参加するフォーラム実のために後方でなく、全面的な広報支援のお力を今から期待しています。

また、予算の準備には、日本代表の大山組織委員長の下、奈良の山田氏、東京の渡辺(紘)氏、長沼氏や隈井氏事務局佐藤さんにもお世話になります何よりも、昨年秋の中国・蘇州大会で福岡開催の経験がある熊本放送の村上氏にお会いし、地方ならではの悩みを共有でき、今後も心の支援を頂きます。

紙面を借りて、図々しいお願いになっておりますが、年初早々お許し下さい。さて、札幌での準備は、北海道庁が核となり、札幌市からもご支援を頂く予定になっております。

何より、フォーラム開催の会場提供を心よく引き受けて下さり、昨年の中国蘇州大会にも参加し、私と共に、大山委員長代理として、次回開催地の挨拶に登壇した北海道大学大学院メディアコミュニケーション研究院の渡辺教授北見准教授そして韓国の玄准教授には、これからも熱い支援を頂くことになります。今から感謝・感謝の毎日です。北大の先生たちは、フォーラムの開催中、独自の市民参加のシンポジウムを企画する一方、厄介な翻訳作業や会期中の通訳を、中国や韓国からの留学生にお手伝い頂く準備をはじめています。

それだけではありません。

昨年末からクロスカップリングの鈴木章名誉教授のノーベル賞受賞で、世界のホットスポットとなった北大、特に会場となる「学術交流会館」は「大志を抱け」のクラーク像やポプラ並木に劣らぬ観光スポットとして、韓・中の放送人に、喜んで頂けるはずです。ノーベル賞会見のバックにあった北大ロゴ入りのボードを使って旬な体験をして頂くことも考えております。

ところで、地方開催の悩みは、翻訳同時通訳不足、日本スタッフの宿泊・食事費用の負担等、問題は少なくありませんが、日本開催こそフォーラムの中身で勝負したいと策を練っています。政治・経済等相互の格差を乗り越え、テレビ文化、テレビジャーナリズムを支える制作者たちが、一同に介して、互いの表現力を磨き合うことの奥深い意味を、身に染みて感じるような大会にしたいものです。

第2回までは、玄海灘のように、日本韓国の間にある歴史的認識の違いが、行く手を阻みそうだったとフォーラムの常任組織委員長として、日韓中の橋渡し役を務める鄭秀雄氏から聞いています。第3回から中国が参加し、毎年テーマを決め、番組を介して、討論し参加者全員投票の微妙な？コンペティションを最後に行うという現在の形になったことも。

一方、国がかりで、開催される東京国際映画祭やソウルテレビドラマアワード、上海国際テレビ映画祭等にある華やかさはないものの、海外の制作者同志が顔つき合わせ、討論するという国際的なフォーラムが、類がないことを今後どう生かすか？フォーラムの重要な課題です。

10年前に開催した当時のお国事情とは、互いが、大きく変化した現実をどう乗り越え、継続できるか否か、問われているのが、第11回札幌開催だと認識しているつもりです。

だからこそ、札幌大会は、放送の原点に帰るように各国が抱える問題でもある「地方」をテーマに、デジタル時代の若き制作者たちに、エールを送る記念すべき大会となるよう厳しい現実（予算）に立ち向かいながらも、表現を磨く日本の心意気を見せたいものです。

長引く不況は、地方の政治・経済に大きな打撃を与えています。「地方」から、放送人が、何かできることがあるはず、それが、札幌大会への誘致理由でもあります。

4月以降、札幌でも小さな制作会社のデスクを借り、準備のための事務所を開設予定です。

札幌へ、応援してください。

北大・門札

北大、正門前

クラーク博士・像

学術交流会館

学術交流会館・内部

ラジオのページ　その3

「ラジコ」って何だ？

武本宏一

最近あなたは、ラジオを聴いたことがありますか。

ないでしょう。大体、身のまわりに今や聴くべき道具としてのラジオが片づけられ、見当たらなくなってしまった。

では、今どきの若者たちは、ラジオに全く接しないのか、というとそうでもなく、彼らは携帯電話やパソコン上で、ラジオを視聴―つまり、聴いたり視たりしているのだ。

ラジオを視る…。ひと頃、FM東京などが主導して「見えるラジオ」というものがあった。

これは、音声多重放送の隙間を利用して、ニュースや放送中の曲目情報などをラジオ受信機にある液晶パネルに文字情報として送るものだった。

（注・後発のJ-WAVEでは、この方式を「アラジン」と別称していた）

しかしこの「見えるラジオ」は、その後の携帯やパソコンの急激な普及と共に次第に姿を消し、今では僅かにカーナビなどで利用されているくらいだ。

さて、他メディアに押されて気息奄々のラジオが、起死回生を図って昨年12月にスタートさせたのが、radiko（ラジコ）なる、インターネット・サイトである。

まあ、一度アクセスしてみてください。そこは、TBS、ニッポン放送ばどのAM局、東京エフエムやJ-WAVEなどのFM局、短波の日経ラジオなど民放ラジオ局が文字通り軒を並べる、〃ラジオのラーメン横丁〃である。

まあ、その賑やかなこと。

トップページでは各局の〃案内看板〃がスライドショーよろしく流れている。

目に留まった局の「LISTEN NOW」というアイコンをクリックすると、たちまちそのラジオ局の番組が、リアルタイムに、生で流れてくるのだ。

勿論、ラジオのキーワードも今やご他聞に洩れず「可視化」である。

パソコン上では、当然のことながら、今しゃべっているアナウンサーの〃アナウンサー日記〃やら、ゲスト歌手の顔写真やらの〃見える情報〃が取り揃えられている。

では、他局は？と思えば、ワンクリックで飛んで行ける。

昔、テレビ受像機にまだダイヤルがついていた頃、ガチャガチャとまわして見比べるザッピングがクセになっていたが、今やラジオもパソコン上でザッピングの聴き比べ見比べが出来る時代になった。

このradikoは、現在関東エリアと、関西エリア中心でしか放送されていないが、遠からず全国をカバーし、またi・phoneなどのスマートフォンにも進出していくに違いない。

絶滅寸前とまで言われたラジオが、この新時代に柔軟に対応し、本来のしぶとさを発揮して生まれ変わってほしい、と切に思う。

但し、アクセスされた回数で計られる新しい〃ラジオ視聴率〃などが、クライアントやリスナーの動向にどんな影響をもたらすのか…、元ラジオマンとしては固唾をのんで見守ることにしよう。

短期連載

赤字会社走る ㊦

大類　啓

新たに戦線を広げる一方、本業の映像制作量の回復を目指し同時進行で「婚活作戦」を展開していました。それは系列局（株主局）だけに限らず、また山形だけにもこだわらず「腕に覚え」をアピールし、企画を売り込む作戦です。隣県仙台市に初の越境攻勢をかけてしばらくしてのことでした。

仙台で知り合った制作会社のA社長から「NHK系列の制作会社が人材を探している」情報があり、すぐ飛び出した。「腕に覚え」をアピール、ほどなく社員ディレクター2人の常駐派遣で合意。さらにこれが縁でNHK山形局からレギュラー番組の声が掛かり、快諾。「民業支援」と映りましたよ、これは。あっけに取られる株主を尻目にNHKとの付き合いは着実に実績を重ね、早くも4年目を迎えました。

こうした婚活作戦の果実に本業外の仕掛け効果が加わり、08年、ついに4年ぶりに黒字転換を果たし、「リストラなし」「賃下げなし」「借金なし」で会社と社員を守り切りました。

本業の映像制作は、民放連と全映協（全国地域映像団体協議会）の番コンでそれぞれ優秀賞を取り、北日本制作者フォーラムで大賞を取り、腕が衰えることはありませんでした。

グルッと周りを見渡し、残るはラジオ。赤字期は、自前でスポンサーを探し局に持ち込んだレギュラー番組1本のみ。ラジオは経営も現場も、いつか石井彰さんが本紙で指摘した泥沼からはい上がれずにいるのが現状です。

さぁ次は、と注目していたのは国（総務省と経産省）がかねて口にしていた制作会社支援策。仕分けにあったりで難産の末昨夏（10年の国の補正予算）、ようやく日の目を見たのが総務省の3ヵ年事業「地域コンテンツの海外展開に関する実証実験」。制作会社に地域密着の番組を発注し、アジア数カ国で放送する計画だ。テーマは海外から誘客を狙った「観光」。企画コンペでなんとか1本確保したが、お金の流れを知ってびっくり。国→大手代理店→地方局→（どん尻に）制作会社。なんと「あるある事典」で論議を呼んだ構図、そのまんま。どだいこの国は財政難。ばらまきとか逃げ腰（実験）とか言われる前に、欧米の支援策を勉強したらいかがでしょう。

やはり当社が安定していくには「自立」と「腕」しかあるまい。経営はその後順調ですが、油断は出来ません。黒字でも走り続けるのが企業の宿命。後継者たちもしっかり学習しました。

さて、地方の一制作会社の繰り言に耳を傾けていただいた皆さまに敬意を表し、本連載の結びとします。　賀正。

シネマ歌舞伎・山形のチラシ

第27回・名作の舞台裏

或る「小倉日記」伝

1993年8月4日放送・TBS
日時・11月27日（土）午後1時半～
場所・横浜情文ホール
ゲスト・筒井道隆（主演）、金子成人（脚本）、堀川とんこう（制作・演出）
司会・石橋冠（放送人の会幹事）

松本清張文学の特色は巨悪の周辺に政・官・財から学会にいたるまで常に権力の影が見え隠れし、犯罪の社会的背景に人間の負の情念を絡ませて描くところにある。旺盛な筆力に映像的な文体が連動する題材に多くの制作者が刺激を受けてドラマ化に尽くした。

1992年死去。享年83。

「或る『小倉日記』伝」は清張一周忌特別企画として放送（93年　TBS）

会場を埋めた観客の大半が清張作品に愛着をもつ年輩世代が多いのも頷けた。とくに上映作品がドラマ化しにくいブッキッシュな雰囲気をたたえる作品だけに、どのように作られたのか、清張ファンは興味をもったのだろう。

石橋　冠氏

司会　私も4分間の謎解きで有名な「点と線」を制作しましたが、比較的地味なこの芥川賞作品をドラマ化しようと思ったのは？

堀川　没後一周忌にあたり、電通側が各局に企画を募集した際に、先年「西郷札」（91年）を制作しており、その延長上で地味ではあるが、松本文学の本質に関わる作品ということであえて森鴎外にからまる芥川賞受賞小説のドラマ化を提案しました。

堀川とんこう氏

堀川　と言っても、たまたま体の不自由な青年が鬱積する気分を持ち、野心や向上心、差別や絶望、失恋、多感な心情がないまぜになって世間を見返してやる、といった屈折した青春ドラマにしようと。身障者という条件に媚びるドラマにはしたくなかった」

司会　かえって身障者の内面の孤独感が出ていました。その点、脚本は苦労があったのでは？

金子成人氏

金子　脳性麻痺の若者という演技の映像化に不安があったが、これを母親と息子、思いを寄せる女性の、つまり小倉日記をめぐる三角関係の中で描く。「母さんが死んだら僕も死ぬよ」という重い言葉にすべてがあるように書きました。

司会　それだけに主人公の耕造役にすべてがかかった。筒井さんの起用は？

堀川　前作の「丘の上の向日葵」で交通事故にあい足が不自由な役どころの青年をやってもらい、その印象が強く残っていた。これは筒井君だと。

筒井道隆氏

筒井　身障者の方がこのドラマを見てバカにされているように思われるような演技はしたくない。施設に通ってあの方々を観察しました。

司会　座ってる二人の前にアルファベットをかたどったビスケットがあるシーンでKISSと並べると「Sがひとつ足りない」という、愛を暗示する小ネタの使い方に感心しました。

―司会はここで会場の今野勉を紹介し―

今野さんも先日放送した「森鴎外の恋人」で遺品のモノグラム「MR」の謎解きをやっていました。

今野　KISSとエリス、おもしろい偶然の符合です。もしかすると田上耕造の位置でエリスの秘密を追っていたのかもしれない。（会場からの発言）

【補】平野謙（文芸評論家）はかつて松本清張について「比喩的にいえば、犯人にして探偵をかねることが、人間探求を眼目とする作家の有力な条件にほかならぬ」と清張文学を高く評価していた。（「松本清張探求」03年　同時代社刊）

記・松尾羊一

第28回・名作の舞台裏

火の魚

2009年7月24日放送・NHK
日時・12月24日（木・祝日）1時半～
場所・横浜情文ホール
ゲスト・原田芳雄（出演）、尾野真千子（出演）、黒崎博（演出）、行成博巳（制作）
司会・渡辺紘史（放送人の会幹事）

年内も〝数え日〟となった最後の祝日（天皇誕生日）、無風快晴の午後。会場周辺は行楽の賑わいにもかかわらず、場内は満席、補助椅子も出る。聴衆は応募900人から抽選された200人余、雑多な集まりなのに開会を待つ間も落ち着いた雰囲気が感じられて、この催しの定着ぶりがうかがえる。「ヨコハマ名物の一つになった」と噂されるのも、あながちオーバーとはいえないようだ。

ドラマ「火の魚」は、NHK広島局の制作で、はじめ中国地区だけで放送されたところ反響が大きく、半年後に全国放送されて評価を決定づけた珍しいいきさつを持つ。ちなみに、初放送後一年余で「名作の舞台裏」に取り上げられたのも珍しく、勿論最短記録だ。

物語は、瀬戸内にある故郷の小島に戻って偏屈に独り暮らしする老作家・村田省三と、東京の出版社から原稿受け取りに通う若い女性編集者・折見とち子との、プロ同士の火花の散る交流を描いてスリリングだが、対立する二人の間に芽生える孤独な心のふれ合いと、〝生と死〟の問いに収斂する結末が、透徹した視線で活写されて、深い感動を呼び起こす。

筆者は会場で観たのが4回目だったが、ある処まで来ると決まって涙が出るので困った。姿を見せなくなったとち子がガンの再発で入院していると判って、村田が途方に暮れ、我を忘れるシーンだ。

さて、目当ての舞台裏ばなしに移ろう。

この一作の衝撃的な手腕で瞠目され、一躍〝全国区〟に輝いた若いディレクター黒崎博さんは弁舌もさわやかだ。

黒崎　博氏

「室生犀星が70歳で書いた原作を本屋で立ち読みし、〝金魚の魚拓を採る〟場面に魅かれて8年間企画を暖めていた。あきらめていたところに行成部長がゴーサインをだしてくれた」。

行成博巳プロデューサーは話の端々に報道感覚が息づく。

行成博巳氏

「一部の地方放送局でたまに作れるドラマだから、鮮烈なイメージが喚起できる話がほしかった。金魚の魚拓を採ると聞いただけで、いけると思った」。

老大家の身辺雑記風短編を〝換骨奪胎〟して、原作とは異質の独自のドラマ世界を創り上げたのは、山陰在住の脚本家渡辺あやさん。小柄で楚々とした麗人（当日は欠席）の彼女の感性と腕力には驚くばかりだが、共に知恵を絞った黒崎Dは、

「渡辺さんは〝ドライな終わり方のできる作家〟と信じて頼んだが、男本位のストーリーを相対化する作業はサド・マゾ的格闘だった」と、苦労を打ち明ける。ドラマ成功の一番手柄はそこだろう。

渡辺紘史氏

司会の渡辺紘史さんはNHKドラマの王道を華々しく担った大先輩で、制作の裏側を知り尽くし、研究にも熱心だ。ツボを外さぬ進行は堂に入っている、ここで今日の主役に質問が及ぶ。黒崎Dが「この人しか考えられない」とキメ打ちし、結果的にベストだったお二人だ。

先ず、幾重ものコンプレックスと孤独とを偏屈に変えた老作家そのものをリアルに体現した原田芳雄さん、

原田芳雄氏

「黒崎さんとは前に一本付き合って信頼していた。それが全力投球の支え。私は演技は現場での瞬間瞬間のリアクションだと思うので、前もって計画は立てない。次が予知できないのが現実で、真実は目前の状況にしかない。予定調和になったらシーンは死ぬ。前半の屋内での対決も、第一印象からなんと強い女だと思い込んで、本気でやった」。

意地悪でフェチの気のある老人の本気を受けとめる、編集者とち子の尾野真千子さんは、役通り冷静で知的な答え。

「相手の強い我の圧力に、誠実に対等に応えるため、自然に沸き上がる感情を確かめながら時間をかけて。細かい指導はなく、待ってもらえたので、とてもぜいたくな演技をさせてもらえました」。

尾野真千子氏

黒崎Dは〝人間として美しい〟人というイメージで尾野さんを選んだと打ち明けたが、成る程、実物の尾野さんは地味ながらハッする清々しさで、会場からは「ノーブル！」と賛嘆の声まで出た。

裏ばなしの最後の盛り上がりは、老作家が100本もの真紅のバラを抱えて無器用に病院を訪ね、死の影におびえるとち子を「わたくし、もててる気分です」と喜ばすラストの名シーンで、泣かないと決めたとち子が泣き、スタッフも感情移入し過ぎて手順を間違え、それをそのまま本番としたエピソードなどが披露された。

行成部長は「ドラマの評価は、地方局の意気込みを示したいと局内が一丸となって取り組んだ結果のご褒美と思う」と謙虚に語ったが、会場の誰もが共感したに違いない。

進行が制作論に傾きすぎて、スターとのナマのふれ合いを望んだ人には少々不満が残ったかも知れない。それを補うような最後の質問は「魚拓にされた金魚はどうなったか？」。答え、「動物愛護上、殺してはいません。局の金魚鉢の中で、今も元気に泳いでいます」。

記　鈴木典之

第13回「放送人の世界」のお知らせ

第13回の「放送人の世界」は、曽根英二さんです。曽根さんは、昨年まで山陽放送に勤め、豊島の産業廃棄物のドキュメンタリー番組で、第1回放送人グランプリを受賞しました。

また、昨年、著書「限界集落　吾の村なれば」が毎日出版文化賞を受賞しました。同著の基になったのは、同名のドキュメンタリー番組でした。

今回は、豊島と限界集落を中心に番組を上映し曽根さんの話を聞きます。

記

タイトル　第13回「放送人の世界～曽根英二・人と作品」

日時　3月18日（金）、3月25日（金）いずれも午後1時半から

場所　NHK青山荘（港区南青山5・2・20）

上映作品　「島の墓標」「おっちゃんの裁判」「限界集落」などの予定。

会員名簿

2011.01.21 現在

【あ】青木裕子　赤井朱美　秋田完　秋山豊寛　雨宮望　新井和子　【い】石井彰　石井清司　石井ふく子　石高健次　石橋冠
磯野恭子　磯村健二　市岡康子　一色伸夫　伊藤雅浩　井上良介　岩澤敏　【う】上田千秋　碓井広義　歌田勝彦　宇野昭
【え】江口展之　遠藤利男　遠藤ふき子　遠藤雅充　【お】大蔵雄之助　太田敬雄　大西康司　大西文一郎　大原れいこ　大山勝美
大類啓　大脇明　岡弘道　岡田晋吉　緒方陽一　岡村黎明　小河原正巳　沖野暸　荻野慶人　小田久榮門　織田晃之祐
【か】加賀美幸子　各務孝　片岡敬司　勝部領樹　葛城哲郎　加藤滋紀　加藤静夫　加藤辿　金沢敏子　兼歳正英　金平茂紀
加納孝夫　鎌内啓子　上安平洌子　鴨下信一　川口健一　川口幹夫　河邑厚徳　河村正一　【き】岸田功　北川泰三　北川信
北出晃　北村美憲　北村充史　木村栄文　木村成忠　【く】楠美昌　工藤英博　隈部紀生　【こ】小池勝次郎　河野尚行　児玉清
児玉久男　後藤和晃　小南武朗　近藤晋　今野勉　【さ】斉藤伸久　斉藤秀夫　斎明寺以玖子　酒井美樹男　寒河江正　坂元良江
桜井均　佐々木彰　佐々木欽三　佐藤年　澤田隆治　沢田隆三　【し】重延浩　重村一　静永純一　嶋田親一　清水満　下崎寛
下重暁子　城菊子　【す】菅野高至　杉澤陽太郎　杉田成道　鈴木昭典　鈴木克明　鈴木典之　鈴木道明　須磨章
【せ】せんぼんよしこ　【そ】曽根英二　【た】高島秀之　高戸晨一　高橋一郎　滝大作　武本宏一　田澤正稔　田中昭男
田中直人　田中則広　田原英二　田原茂行　【ち】千葉勉　【つ】辻本昌平　露木茂　鶴橋康夫　【と】土居原作郎　堂本暁子
戸田佳太　外崎宏司　豊田由紀子　豊原隆太郎　【な】中崎清栄　中澤忠正　中島僚　中田美知子　永田浩三　長沼士朗　永野敏一
中村敦夫　中村克史　中村季恵　中村耕治　中村敏夫　中村芙美子　中山和記　難波秀哉　【に】新村もとを　西ヶ谷秀夫　西川章
二宮文彦　丹羽美之　【の】信井文夫【は】萩野靖乃　橋本潔　林健嗣　林裕史　原由美子　原田庸之助　【ふ】深町幸男
藤井チズ子　藤田晋也　藤久ミネ　【ほ】星田良子　堀川とんこう　【ま】前川英樹　松尾羊一　松平定知　松前洋一　松本明
松本修　松本国昭　【み】三上義智　水上毅　水野憲一　三村景一　三村千鶴　宮川鑛一　三宅恭次　明神正　【む】村上光一
村上雅通　村上佑二　村田亨　【も】守分寿男　諸橋毅一　【や】八木康夫　矢島良彰　薮内広之　山県昭彦　山崎隆保　山崎裕
山路家子　山田尚　山田良明　大和定次　山根基世　【よ】横山英治　吉澤保　吉永春子　吉村直樹　【わ】和田智允　渡辺紘史

訃報

吉村　光夫さん

11年1月3日、急性心不全でなくなりました。享年84。NHKから、ラジオ東京（TBSの前身）へアナ第1期生として入社。背が高い（178cm）ことから「ロングおじさん」「ロンちゃん」の愛称で親しまれ、番組では「夕焼けロンちゃん」や「まんがはじめて物語」のナレーションが有名です。TBS在職中から鉄道マニアで、鉄道友の会・理事、鉄道模型の会・会長を務め、鉄道の話を始めると止まりませんでした。

横沢　彪さん

11年1月8日、肺炎で亡くなりました。享年73。62年東大卒後フジテレビ入社。80年代に「THE MANZAI」「オレたちひょうきん族」「笑っていいとも！」など、楽しくなければテレビじゃないテレビの多様性を求め寄席表現に依拠した色物娯楽観とは異なるエンタテインメント開拓（「らくごIN六本木」）、フジ退社後はさらに「笑ビジネス」を求め吉本興業など、新しい娯楽の方向を模索した矢先だった。放送人の会では句会に入り、「漂金」の俳号で軽妙な句を…

春雷や煮付けを崩す箸止まる
国産じゃないと蜆が泥を吐き
春雷や歩み変わらぬ車椅子

合掌

編集後記

▼昨年11月末に「改定常用漢字表」が内閣告示され、それを受けて昨年末朝日新聞の「新聞用語の手引き」が出版されました。30年前に出された「用語の手引き」もよく利用されましたが、今回のも店頭に平積みされよく売れています▼この会報も表記の基準を定めたい、朝日新聞の基準に従うのは便利だ、と思っています。これまでも数字は洋数字を基準にしてきましたが、今回いただいた原稿の数字もこの基準に従い、原則として洋数字にしました。漢数字でお書きになった方には違和感があるかもしれませんが、なにとぞご寛恕のほどを▼パソコンのソフトWORDの古いヴァージョンを使っていましたが、受け取った原稿が開けないケースが頻発して、とうとうWORD2010にヴァージョン・アップしました。時代に遅れないよう懸命ですが、今のところ快調です。▼「新年所感」には予想以上の寄稿をいただきました。ありがとうございました。　**視郎**